

## 国語科

# 比べて考える活動を取り入れた国語科学習

—「はじめは『や!』」の実践から—

渕山真悟

### 1. はじめに

物事を考える際に、一つの資料から気付きや考えをもつことは難しい。自分自身の経験や知識を想起し、与えられた資料とそれを比べて考えなければならず、とても高度なことが求められているのである。その難しさは、与えられた一つの資料について考えるために、比べる対象を自身で用意しなくてはならないことにある。

授業を進める上で、気付きや考えを発表させる時、子どもたちからの反応がよくないときは、上記のような状態になっていることがある。そこで子どもたちの思考を助ける手立てとして、教師が比較対象を用意し、目に見える形で比べることができるようにする必要があると考えた。

小学校学習指導要領解説国語編には「目的に応じて、本や文章を比べて読むなど効果的な読み方を工夫すること。」「目的に応じて、複数の本や文章などを選んで比べて読むこと。」とある<sup>1)</sup>。

川上(2009)は、「『比べる』ことは、端的に言えば思考することである。複数の情報を比べる時、そこには必ず思考が伴う。『どこが違うのか』『どこが同じなのか』『どちらが〇〇なのか』など、複数のものを示された瞬間に人間は思考を始める。そしてその原因を二次思考として考え始める。つまりは意味付けをするのである。』<sup>2)</sup>と説いている。白石(2009)は、比較だけをして終わる一般的な比較法を批判したうえで、「比較、類推していくことはいいことだが、比較、類推をしておしまいはいけないのです。比較することが到達点ではないのです。比較することは一つの通過点。比較してその向こうに何を読むか、何を見つけるかという

ことが大切である。」と指摘している<sup>3)</sup>。両者ともに「比べる」ことを思考することの一つの有効な手立てとして考えているのである。

また、これまでも思考するための手立てとして、比べることを学習に取り入れた実践が行われてきている。松本・森田(2010)は、新聞記事の読み比べを通して、思考法に着目した実践研究を行い、分析・比較・統合・判断・推理という思考法が向上したとしている<sup>4)</sup>。立石(2012)は、「テキストの比較から自己の作品観をみつめさせる文学的文章の指導」として、教育出版と光村図書の教科書に載っている「大造じいさんとがん」を比べて大造じいさんの人物像の違いについて話し合っている。児童の大造じいさん像が揺さぶられ、自分の中の大造じいさんの生き方や自分にとっての作品の価値を見つめさせることができたとまとめている<sup>5)</sup>。

ここまで挙げた先行研究が述べている、比べて考える活動を取り入れて子どもたちの学びを深めていく考えに賛同し、本研究では、一つのもので考えるのではなく、類似した二つのものを比べて考えることの有用性を、実践を通して考察していく。

### 2. 研究の構想

#### (1) 子どもの思考を助けるために

子どもが思考しやすくするために、比較対象を学習の中に意図的に設定し、比べて考えることができるようにする。

#### (2) 比較対象について

比較対象は、類似しているものが望ましい。一

つを見るだけでは当たり前のこととして見過ごしていたことに、類似した二つのものを比べることで気付いたり、比べて考える回数を重ねることで、ものの特徴や系統を見つけたりすることができる。と考える。

比較対象として設定するものは、教師が設定する文章や学習者同士の考え、過去の自分などが考えられる。設定する比較対象によってねらいも異なると考える。具体的には下記のようなものである。

①テキストの差異を見つける比較対象

問題と出会わせる際に、類似する二つのものを並べて考えることで、問題意識をもたせる。

②自己の差異を見つける比較対象

自己の学習前の考えと、学習後の考えを並べて考えることで、自己の変容を見とらせる。

③考えの差異を見つける比較対象

学習者が個の考えをもった後に、他の学習者の考えと自己の考えを並べて考えることで、思考に深まりをもたせる。

### 3. 実践事例

#### (1) 題材

「はじめは『や!』」

#### (2) 授業実施学年及び人数

第1学年 39名

#### (3) 調査実施期間

平成23年11月

#### (4) 授業の構想

##### ①単元について

本教材には、登場人物(くまさん・きつねさん)の言葉にならない心情が描かれている場面が多くあり、子どもたちは登場人物の行動や自分の経験をもとに登場人物の心情に思いをめぐらせることができる。教材文が長くなり、内容としても読みとりにくい部分があるが、一度は誰もが経験したことがあるであろう、相手との距離の取り方、間の埋め方の難しさが描かれているため、何度も音読する中で少しずつ読み解いていくことができる

と考える。また読み終えたときには、友だちとコミュニケーションをとるために、言葉がとても大切な役割を担っていることを、感覚的に感じることができる教材である。

本教材を学習するにあたり、場面ごとの意識はもちつつも、全体を通して読み、登場人物の心情を考えていく。その後、題名に対する三つの疑問(①“なぜ、この題名になったのか”②“なぜ、「や!」なのか”③“なぜ「!」がついているのか”)の答えを考える活動を通して、登場人物の行動を中心に場面の様子について想像を広げながら読み取る時間を設ける。その際には、比較対象として題名の代案(①“はじめは「やあやあやあ!」”②“はじめは「こんにちは!」”③“はじめは「や。」”)を提示し、どちらの題名が本文にふさわしいか、どうして『はじめは「や!』』という題名になったのかを比べて考えさせる。その後、もう一度登場人物の心情を考える時間を設定し、学習前の読みと学習後の読みの違いや考え方の変容に気付かせる。最後に登場人物に手紙を書く時間を設定する。

##### ②目標

- 登場人物の心情を、想像を広げながら読むことができるようにする。
- 根拠のある自分の考えをもつことができるようにする。
- 進んで自分の考えを話したり聞いたりすることができるようにする。
- 本文の内容を踏まえて、登場人物に手紙を書くことができるようにする。

##### ③学習計画

子どもが思考しやすくするために設定する比較対象として、第1学年の子どもの実態と教材の特性から、本単元では①「テキストの差異を見つける比較対象」と②「自己の差異を見つける比較対象」に焦点をあてて学習計画を立てた。

- 第1次 はじめは「や!」をよもう・・・3時間
- 第2次 だいたいからかんがえよう・・・4時間
- ・「はじめは「や!」」と

「はじめは「やあやあやあ!」」

・“はじめは「や!」”と

“はじめは「こんにちは!」”

・“はじめは「や!」”と“はじめは「や」”

第3次 「はじめのよみ」と

「いまのよみ」をくらべよう・・・1時間

第4次 ○○なくさんに手がみをかこう

・・・2時間

### (5) 授業の実際

<第1次 はじめは「や!」をよもう>

○ 第1時

全文を1枚にまとめた資料を配付し、ペアを作って全文を読み合った。

これまで学習した物語と比べて文章が長く、内容としても読みとりにくい部分があること、形式段落ごとではなく、全文を捉えながら読むことが、子どもたちにとって困難であると考えた。そこで繰り返し読む工夫として、ペアで読んだり外に出て気分を切り替えて読んだりと様々な読み方を取り入れた。お話の内容の大体を捉えながら読むことができた。

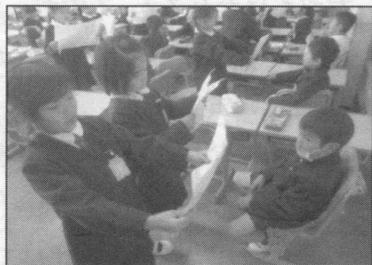


図1 ペアで音読

○ 第2時

全文を読んで、分からない言葉や、ひっかかりを覚えた表現を出し合った。子どもたち同士で、分からない言葉は他の言葉で言い換え、ひっかかりを覚えた表現はそれぞれの考えを出し合って共通理解を図った。例えば、分からない言葉「とたんに」は「きゅうに・すぐに」という言葉に言い換え、ひっかかりを覚えた表現「・・・・・・」は「いいたいことが言えていない。」といった具合である。多くの疑問とそれに対する答えが、子どもたちの中で行き交い、互いの理解を共有し合うことができた。

○ 第3時

次に本文に出てくる四つの「・・・・・・」に着目し、くまの気持ちを想像し、吹き出しの中に書かせた。第3次で、もう一度同じ活動を仕組み、

個の考えの変容を感じさせるために、この時間はあまり考えを絞らず書かせた。ただし、四つの「・・・・・・」は同じであるかどうかについては記述させる前に考えさせた。

<第2次 だいまいからかんがえよう>

○ 第1・2時

はじめは「やあやあやあ!」という題名をつくり、教科書(学校図書1年下)の

「やあやあやあ。」  
とたんにふたりは、とつてもとつてもうれしくなつて、その日からなかよし、いちばんのともだちになりました。

を根拠に、仲良くなったのは「やあやあやあ。」と言ったあと(二日目)だから、はじめは「やあやあやあ!」という題名の方がいいのではないかと投げかけて考えさせた。

話し合う前に、子どもたちにどちらの題名がこのお話にふさわしいか挙手をさせ、意思表示を行わせた。

話し合う前の子どもの考え

はじめは「や!」	17名
はじめは「やあやあやあ!」	22名

題名を比べて考える活動をきっかけとして、どちらの題名が本文にふさわしいか、教科書の本文を根拠として、意見を出し合った。

はじめは「や!」派  
・くまさんときつねさんが、なかよくなりはじめたのは、ベンチに座って、初めて話しかけた「や。」だから、はじめは「や。」という題名でいいと思います。

はじめは「やあやあやあ」派  
・このお話は二日間のお話で、教科書にその日からと書いてあり、二日目からということだから、はじめは「やあやあやあ」という題名がいいと思います。

その他  
・はじめというのは、一番初めのことだから、はじめは「・・・・・・」がいいと思います。

「はじめは『・・・・・・』」という新たな題名まで出てくることは予想していなかったが、子どもたちが比較対象をもつことで、本文を根拠として自分の考えを交流することができた。

その後、題名の「はじめ」は何のはじめをさすものであるかによって、後ろに続く言葉が変わってくることに話して、このお話の山場はどこであるのかを考えることとした。以前読み聞かせで読んだ、「かちかち山」と「さんびきのくま」のお話の山場を例に、主人公が大きく変わるころをさがすように伝えた。しかし、やはり難しかったのか、ベンチにすわってくまさんが「や。」と言った場面と結びつけることができた子どもは半数ぐらいであった。

話し合った後の子どもたちの考え

はじめは「や!」	29名
はじめは「やあやあやあ!」	6名
はじめは「・・・・・・」	4名

○ 第3時

第2時の子どもたちの様子から、「どちらの題名がよいか」を考えさせると、子どもたちの思考を揺さぶるだけ揺さぶり、迷わせたまま授業を終えてしまう危険性あると感じ、第3時は「どちらの題名がよいか」という聞き方はやめ、第2時とは異なる学習課題「どうしてくまさんは、『こんにちは。』ではなく『や。』といったのか」を子どもとつくり、学習を進めた。この疑問は、第1次の第2時において子どもがくまさんの気持ちをイメージして書いたものの中に、『『こんにちは。』と言おうかな『や。』と言おうかな』という記述があったことからヒントを得た。

初めに日頃の自分たちのあいさつを想起させ、どんなあいさつをするか問うと、「こんにちは。」が大多数であった。そこで、比較対象となる「はじめは『こんにちは!』」という題名をつくり、「どうしてくまさんは『こんにちは。』ではなく『や。』といったのか」を考えることとした。

まずは、「や。」と「こんにちは。」の言葉のもつ性格の違いを出させた。

表1 子どもたちが出した二つの言葉の違い

「や。」	「こんにちは。」
<ul style="list-style-type: none"> <li>・短い</li> <li>・1文字</li> <li>・勢いがある</li> <li>・乱暴な言い方</li> <li>・かっこをつけている</li> <li>・元気な感じがする</li> <li>・テンションが高い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・長い</li> <li>・5文字</li> <li>・丁寧な言い方</li> <li>・よく使うあいさつ</li> </ul>

その後、「や。」という言葉がもつ性格(表1太枠)に注目し、なぜくまさんは、「こんにちは。」ではなく「や。」と言ったのか、考えを交流した。

- ・緊張で、長い言葉は話せないのだと思います。
- ・教科書に、「少しすまして」とあるから、恰好をつけたかったのだと思います。
- ・友だちになれるか、不安だったのだと思います。
- ・勇気を振り絞って出た言葉が「や。」だったのだと思います。
- ・友だちになりたいという気持ちが半分と、不安な気持ちが半分あったからだだと思います。

子どもたちは、題名を比べて考える活動を通して、くまさんの心の中に、迷いや不安などの葛藤の気持ちがあることを見つけることができた。

○ 第4時

題名の「はじめは『や!』」の「や!」は、教ベンチに座ってくまさんが初めて声を出した場面の「や。」である。しかし、その「や。」には題名には付いている感嘆符がついていない。そのことを子どもたちと確認し、なぜ題名には感嘆符がついているのかを考えることとした。

まず、「や。」「や!」を比べて感嘆符がもつ性格を出させた。

- ・「!」がついている方が、勢いがあると思います。
- ・「!」がついている方が、大きい声です。
- ・「!」があると目立って見えます。

その後、なぜ題名に本文にはない感嘆符をつけ

たのか発問したが、子どもたちの思考はなかなか深まらなかった。

やはり、子どもたちの発達段階もあり、作者の想いを想像することは難しかった。前時のくまさんの気持ちに目を向けさせ、「や。」の声の大きさや、話しかけたい気持ちの大きさをとらえさせるなどの手順をもう少し踏んで発問する必要があった。

この時間ではそれが上手いかず、くまさんの声の大きさと、気持ちの比較を行い、くまさんの想いは大きい、「や。」の声の大きさは思いと比べると小さいものだったのではないかと教師から話した。

そこでやっと子どもから、本文では声の大きさが小さいため感嘆符をつけず、題名はくまさんの初めて発した言葉への決心の大きさを表すために感嘆符を付けたのではないかという意見が出てきた。子どもたちの中には、これまで感嘆符に目を向けていなかった子どももあり、「何度も読んできたが、気付いていないことがまだまだある。」というつぶやきが聞こえた。

<第3次 「はじめのよみ」と  
「いまのよみ」をくらべよう>

第1次の第3時で行った本文に出てくる四つの「……………」に着目し、吹き出しを用いて、くまの気持ちを想像して書く活動を再度行った。題名を比べて読む活動を4時間とって学習したことで、自分の読みにどのような変化があったか、目に見える形にするためである。

題名の比べて読む活動で大きく取り扱ったのは、お話の山場であるくまさんがはじめて「や。」と言った場面である。そのことから「はじめのよみ」と「いまのよみ」で大きく変化する場所は四つ目の「……………」のはずである。

四つの「……………」 の中で無回答がある。	8名	0名
--------------------------	----	----

多くの子どもが四つ目の「……………」に対する記述の中に、くまさんが話しかけようか迷う葛藤の気持ちを書いていた。残りの4名は、始めの読みとは異なることを書いていながらも、葛藤する気持ちは書かれていなかった。

<第4次 ○○なくまさんに手がみをかこう>  
○ 第1・2時

単元の最後に、くまさんに手紙を書く活動を取り入れた。子どもたちは、くまさんのイメージやくまさんへの想いを、宛名の「○○(な)」の中に入れた。

- ・頑張ったくまさん
- ・恥ずかしがり屋なくまさん
- ・勇気があるくまさん
- ・勇気を出したくまさん
- ・友だちができたくまさん

その後、くまさんに手紙を書いて、この単元の学習を終えた。

**子どもが書いた手紙**

- がんばったくまさんへ  
あたらしいおともだちができてよかったね。  
もっともっとおともだちをふやしてね。
- ゆうきがあるくまさんへ  
くまさんはいい人ですね。なぜかという、じぶんからともだちになろうとして、こえをだしたからです。きつねさんと、さいごには一ばんのおともだちになれましたね。

**4. 考察**

今回の学習では、子どもたちの思考を助ける手立てとして、比較対象として①「テキストの差異を見つける比較対象」と②「自己の差異を見つける比較対象」を設定して学習をすすめた。それらについて考察する。

**表2 結果の表**

	始めの読み	今の読み
四つ目の「……………」 で葛藤の心情が書かれている。	7名	35名

### ①テキストの差異を見つける比較対象

三つの題名を用意し、もともとの題名である「はじめは『や!』」と比べることで、登場人物の気持ちへのイメージを広げることができた。一つ目の「はじめは『やあやあやあ!』」と比べる学習では、くまさんときつねさんの気持ちが近づきはじめるきっかけに気づくことができた。二つ目の「はじめは『こんにちは!』」では、くまさんの緊張や不安、友だちになりたいなどの気持ちを読み取ることができた。三つ目の「はじめは『や。』」と比べる活動では、なかなか学習内容が深まりにくかったが、新たな発見や視点をもつことができた。これらのことや、子どもたちの授業中のつぶやきから、題名を比べて考えたことで、分かったつもりでいた自分に気づくことができていたようである。どちらとも適当と思われる二つの表現や言葉を並べて、どちらかを根拠をもって選ぶことで、その違いや一つの表現の良さを見つけることができる。しかし比較対象の妥当性には、まだまだ課題が残った。子どもたちが出した「はじめは『・・・・・・。』」という題名と比べる学習展開も考えられだろうし、三つある比較対象を取り扱う順番を変えることで、また違った成果も得られたと考えられる。

### ②自己の差異を見つける比較対象

学習前の考えと、学習後の考えを並べて考えることで、自己の変容を見とることをねらい同じ活動を学習の前半と後半に取り入れた。子どもたちは、学習前の考えを学習後半で振り返ることで、学習の成果を感じることができた。今回の実践では、四つの吹き出しにくまさんの気持ちを想像して書き込む活動を設定したが、四つを一つに絞ることでより効果が得られたと学習を終えて感じた。次回に生かしていきたい。

## 5. おわりに

本実践から、比べて考えることでより考えが深まる子どもや、自分の考えをもちやすくなる子どもが多くなることを感じ、この研究に大きな可能

性を感じた。「比べて考えること」を軸とし、今後も様々な実践を行っていきたい。

### <引用文献>

- 1) 文部科学省：「小学校学習指導要領解説 国語編」, p. 87, 2008, 東洋館出版社.
- 2) 川上弘宜：「『比べ読み・重ね読み』で『一人読み』」, p. 24, 2009, 明治図書.
- 3) 白石範孝：「白石教孝の国語授業のつくり方 p. 114, 2009, 東洋館出版社.
- 4) 松本哲 森田諭：「思考法に着目した実践研究 - 「新聞記事の比べ読み(国語科)」を通して - 」, 奈良教育大学教育大学院研究紀要「学校教育実践研究」, 2011.
- 5) 立石泰之：「テキストの比較から自己の作品観を見つめさせる文学的文章の指導 - 第五学年「生き方を見つめて読む『大造じいさんとがん』の実践より」, 学校教育, No.1134, 2012.